
爆音兀戦争

ねこたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆音戦争

【Zコード】

Z5350D

【作者名】

ねこたん

【あらすじ】

できたばかりの暴走族！爆鬼天は隣町の族との勢力争いに日々はげんでいた。しかし、あるひ総長の最愛の人がさらわれ、敵は最強の男、蛇と手を組んで爆鬼天をつぶそうとする。この、族の運命はいかに？若き男たちが自分の1番大切なもののために雨の夜を爆走する！（生徒会長が愛死天流の番外編！です）

前編・真夏の夜の夢（前書き）

生徒会長が愛死天流の番外編！です

ブウンブーン

けたたましいバイクの音がする。黒い特攻服に身をつつんだ若き少年たちが何人も鉄の馬にまたがり、暴走している。

ここ、青海町では、1ヶ月前に強力な暴走族、爆鬼天と呼ばれる集団ができた。これは、その族の物語である。

時期は現在8月である。太陽がサンサンと照りつける猛暑の季節。

このできてまもない暴走族にはとある問題があつた。ちょうど同じ時期に隣町、宝美町にできた暴走族、白龍爆走連合、通称白龍と勢力争いをしていると言う事だ。できてすぐに勢力争いだなんて・・・。

そんな中、土曜日の爆鬼天の集会でのことである。

「みんな、あつまつたか?」

総長、湯水がみんなに声をかける。

「あきらたちがまだきてやせん」

「そうか・・・」

いつものような会話をし集会をしていると突然1人の男が飛び込んできた。

「総長、大変です。あきらたちが、東のゲーセンで遊んでいたら、白龍のやつらが攻めてきてやられてしましました!」

あきらとは?

爆鬼天の副リーダ格の男で、そのつれ3名とゲーセンに行つていたところ、白龍にボコされたのであった。

「あきらは、どうした?」

心配そうに総長が聞くと、

「つかまつて、今頃ケジメかと・・・」

「よし!助けに行くぞコラア!」

掛け声とともにいつせいにバイクにまたがる爆鬼天の連中・・・。集会所からさほど遠くないゲーセンに向かつた。

ゲーセンの駐車場には、白い特攻服を着て、バイクに龍の旗を掲げた連中がいた。白龍だ!

その中に黒い服をきた人間が4人ほど正座させられている。敵の数は約15人・・・かなりの数である。

しかし、湯水もその手下たちもビビルことなく近くまでバイクで接近し、

「かこめえ！！」

湯水の言葉にそれに続く暴走族たちが白い特攻服をきた男たちのまわりをグルグルまわりながら、たまにヤンキーホン（ラッパ）を鳴らしたり、木刀でつづいたりして戦闘が開始された。

「ああ？ なんだ？ おめえーらー！」

白龍のやつらの質問に総長は

「爆鬼天じや！ ボケエ！」

そう、どなり声をだすとバイクを止め堂々と地面に降り立つ。

「俺の仲間を帰してもらおうか？ そもそもねえーとおめーらーぶつ殺すぞ！」

「ヤーヤと笑いながら白龍の一人が

「そりやあおもしけえ！ やつてみな！」

その言葉で完璧な戦闘が行われた。木刀、バッド、鉄パイプ、火炎瓶など様々な武器が使用された・・・駐車場は戦場と化した。

月が出る時間、爆鬼天はバイクにまたがり道路を走っていた。時折聞いたこと有るようなメロディーのラップ音をヤンキーホンで鳴らしながら。

パラリバラ、パラリバラ パラリラ
ツタラ

ヤンキー関係者は知っていた。この音楽が爆鬼天の勝利を告げる音楽だと。

ゲーセンの駐車場で行われた激しい戦闘は爆鬼天のみごとな勝利に終わった。総長の湯水の喧嘩の腕はたいしたもので、相手がいくら武器を持っていようとすべて素手で倒してきた・・・
当然、族のみんなからも尊敬の眼差しでみられていた。
しかし、

あの戦いから4日がすぎたあくる日に湯水は突如として病院に運ばれた。あきら等の複数のメンバーが病院に駆けつけた。

「総長、どうしたんすか？なにがあつたんすか？」
心配そうに自分を眺めるメンバーたちに湯水は言った。

「すまない・・・麻里がつかまつてしまつて・・・俺だけで助けに行つたんだがかなわなかつたよ。」
麻里とは？

総長、湯水の愛しの人。つまり彼女である。性分はギャルだが優しくメンバーのみんなからも理想の女性と言われるほど美人だつた。その麻里は2日ほど前に白龍につかまつて宝美町につれていかれたというわけである。湯水は自分一人で助けに行つたが、しくじつたのだった・・・

「そんな・・・じゃあ俺らが行きます。俺らが総長の仇とつきます！」

そう言つてダッシュで出て行こうとするメンバーに湯水は「だめだ！行くんじゃない！あいつが・・・あいつが白龍と手を組んでる。」

「だれですか？」

すると、湯水は大きく深呼吸すると・・・

「蛇だ・・・」

そつゆつくり言つとクタリと横になり寝てしまった。

蛇・・・聞いただけでぞつとする。この近辺最強の暴走族、”華姫悪”の総長で喧嘩で右にぐるものはいないといわれている。彼に目をつけられたらおしまいとまで言われている。本名、中川裕也ながわねうやである。

その言葉を聞いて、他のヤンキーたち立ち去った。勝てるわけがねえ・・・そう思つたのだろう。

総長はぐれじきのあまり涙もながせないでいた。愛するものと、愛するチームがもうすぐ消えてなくなるかも知れないのだ・・・

真夏の夜の夢はやつして始
まつた。

本編もよろしくお願ひします。

本編～生徒会長が愛死天流～

<http://nocode.syosetu.com/n4235d/>

超優等生な女子、山内雛菊と超不良な赤城幾斗の爆走ラブコメです。
ひまだつたらみてください。それに暇だつたら「メンントください。

中編・不幸中の幸い（前書き）

むふふ
WW

爆鬼天の連中の中は乱れきっていた。蛇という名を聞いただけ
でメンバーのほとんどがビビリ、族を抜けようとするものが多く発し
た。

「なあ、この族もそろそろおわりだぜ？」

「そうだな、シメられるまえに抜けようぜ？」

とあるメンバーの2人がそんな話をしているとあきらはその2人の
胸倉をつかむと、

「おい！お前らいつからそんな腰抜けになつた？」

「そ・・んなこと言われても相手が相手でしょ？」

たしかに、現在の爆鬼天では勝ち目が無い。しかし、あきらは

「ふざけんな！爆鬼天が白龍なんかに負けるわけねえだろ？」

「そ・・そんな強気なこと言つても、あんたも負けた暁には命
乞いするんでしょ？」

・・・・・あきらはだまつた・・・それは、確実に負ける戦争だ、
しかし自分はこの爆鬼天が負けるなんて思いたくも無かつた・・・
そう、思いたくなかつただけだった・・・自分でもわかつてゐる負け
るつて。

人生には変えられない運命があるんじゃないだろうか？これが爆鬼天の運命か？

「お・・・おーい。助けてくれえ・・・・・」

そう言つて一人のメンバーが集会所にやつてきた。

「どうした？」

あきらが問うと、

「白龍と蛇の単車がこの近辺に来て・・・・東ヶーセンと南公園がのつとられた・・・・」

「はあ？そこに味方が何人かいたる？」

「全員やられました。」

ボー然と立ち尽くすほかのメンバー。きつとビビッて身動きもできなのだろう。

「このまま奴らにのまれるのか？この族は・・・・

悔しくて口も開けないあきら・・・・そこには一人のメンバーの男が近寄つた。

「なにしてるんですか？あきらさん。助けに行きましょう」

そつなんの変哲もなく言つ男・・・・・武藤勇氣であった・・・・

「は・・・・はあ？助けられるわけねえーだろ！逆にやられちまつ聞いてたメンバーのみんなが口を開く、すると武藤は

「いいじゃないですか負けても、まあ負けないでしちゃうけど」

「はあ？相手がだれかわかつてんのか？」

「いいえ、誰です？蛇つて……」

「つたく……これから……いいか蛇つてのは……」

「言おうとしたメンバーの男を手で制すると武藤はゆっくり

「私があきらさんと一緒に白龍につかまつたとき、湯水さんは助けにきてくれました、私はそれだけで嬉しかった……ああ……見捨てずにしてくれたんだなあーと。」

メンバーのみんなはただひたすら武藤の話を聞いていた

「だから、勝ちとか負けとかそんなんじゃなくて、困ってる、助けをもとめる仲間がいるならば、それは助けに行けばきなんじやないですか？それが仲間でしょ？ね？あきらさん」

そう言つて二コ二コほほえみながらあきらに問ひ武藤……それに対してもあきらは

「お・・お！」

その一言が終わった瞬間「おおー！」とか「行くぞオラア！」とか

各地で雄たけびの声を叫び、皆いつせいにバイクにまたがる。

夏の夜の月が出でている、時刻は8時……そんな時間に南の公園では激しい戦闘音とラッパ音が鳴り響いていた……

「じりやあー！」

「じつふ・・

「うりやー！」

掛け声、雄たけび、叫び、鈍い音などいろいろな音が聞こえてくるがそれも9時には終了した。

予想していた結果とはいえ、爆鬼天は惨敗・・・しかし、仲間を助けることはできた・・・不幸中の幸いと言つやつである・・・

次に田の集会で昨日つかまっていたメンバーの男からあきらはこ
んなことを聞いた

「ああ、なん、やつら畠田攻めておあ、せー。」

「ええ？ マジ？」

「はい、やつら詰つてました。」

—

もう、終わりだ！次こそつぶされる・・・

「あれ、どうした？」

武藤があざわらうにうながしながら近づくと、

- 1 -

武藤の言葉はみんなかい？ せりは笑い出す

メンバーのみんなが「やったー」と喜んでいたが、しかし武藤はさすがに平然としていた。

のであつた。

「だつて攻撃してへゆんだしちゃう、じやあ逆に攻撃してやつましようよ」

しかし、みんななかなか賛同しなかった。たとえ相手が白龍でも、バツクには蛇がいる・・・それが何よりも恐怖をあおっていた。

「みなさん行かないんですか？じゃあ僕だけでも行かしてもらいますよ？」

そう言って武藤はバイクにまたがりただ1人ラップ音を響かせながら走った・・・

あきらをふくめたメンバーは、その背中をいつまでも眺めていた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5350d/>

爆音戦争

2010年10月11日15時10分発行